

2016年12月4日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 59 章 13～20 節

説教：主は来られる

はじめに

二本のろうそくに火が灯され、待降節の第二週目を迎えています。

ダビデがイスラエルを一つの国にまとめた後、それから百年もしないうちにイスラエルは南王国ユダと北イスラエルとに分裂してしまいます。その北王国イスラエルもアッシリヤによって滅ぼされ、次に南王国ユダにアッシリヤが攻め込んでくることはだれの目にも明らかでした。それが明日なのかそれとも一年後なのかはわかりません。でも、敵が攻めてきたら殺されるか、生き残ってもすべてのものを失うか、いずれにしても最悪のことが待っています。未来に希望はありません。いまさら正しいこととか、正直であるとかそんなことに何の意味があるのか。そんな雰囲気蔓延してきます。「あなたのやっていることは間違っている」と正義を訴えても聴く者はいません。自分のことしか考えなくなります。イザヤは、そんな時代に南王国の人々に向けて神のことばを語った人でした。いったい何を語ったのか、続けて見て参ります。

1 人の現実

1) 何が原因なのか

イザヤ書は今からおよそ二千七百年前に書かれたものです。でも、読んでいるとなんだか今の時代とたいして変わらないのではないかと感じてきます。もちろん、今は敵が攻め寄せてくるようなことはないでしょうが、以前に比べて未来に希望を持てなくなっ

てきているような気がします。何が原因なのでしょう。ある人は経済に問題があると言い、ある人はいや教育であると言い、ある人は政治に問題があると言います。

ではイザヤはなにが問題であると言ったか。13 節。「私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。」

自分たちは神に背いた者である。それが問題の根本にあると言っています。神に背いたので、人々は自分だけのことしか考えなくなり、ほかの人を踏みつけていく、そんな世の中になったのだというのです。例えば、口では親切そうなことを言うけれど、心の中では「おまえは役立たずだから早く死んでしまえ。」そういうことを平気でつぶやいている。それがこの時代である。私たちの本当の姿である。すべてさかのぼれば、人間が神に背いたこと、そこに問題の根っこがある。そう言い切っています。

2) 神はいないのか

こんなことを言うと信仰のない人からは反論が来ます。「いるかいらないかわからないような神を出さないでもらいたい。そもそもキリスト教のような宗教が他の神を認めないから戦争が起きているではないか。だから宗教はきらいだ。」言いたいことはよくわかります。私もときどき言います。「宗教は怖い。」しかしそこで終わったのなら、私たちがいまここに座っている意味はなくなるで

しょう。なのでその先を言わなければなりません。

どんな親でも子どもを育てるときになにを教えるでしょうか。人のものを盗んで良いと教えますか。嘘をついてもよいと教えますか。欲しい物があるなら力づくで人から奪っても良いと教えますか。親は子どもに盗めとか、嘘をついたもよいとは教えません。でも以前のことで、ある親が自分の子どもに店で盗みをさせていたというニュースを聞いて驚いたことがあります。これがニュースになったのは、人間が生きていく上での最低限のルールが簡単に破られていると感じたからでしょう。

3) 正直は中に入ることもできない

では親が子どもに盗みを働かせるようなことは、非常に希な話なのか。14 節にこうあります。「こうして公正は退けられ、正義は遠く離れて立っている。真理は広場でつまずき、正直は中に入ることもできない。そこでは真理が失われ、悪から離れる者も、そのとりこになる。」

おそらく信仰のない方であっても、今の世の中を見るなら 14 節のみことばには納得していただけるのではないのでしょうか。多くの人は、世の中は何かがおかしい、不公平であると感じています。職場では悪いことをしていても、要領の良い人が高い評価を受けて昇進する。いっぽう、自分はまじめに正しくやっているのにそのことは評価されず、かえっていわれない中傷やいじめをうける。

職場だけではない。家族の間でさえそうです。親子の間で、あるいは兄弟どうしが争っています。愛し合って結婚した夫婦なのに、相手を裏切るようなことをしてしまいます。

そこで多くの人たちが傷つき苦しんでいます。

「がんばりましょう。努力しましょう。そうしたらよくなります」と、ある人たちは言います。それで今まで一生懸命がんばりました。でも全然希望が見えません。無力感だけが増してきます。やれることと言えば、あきらめて悲しむか、怒りをほかの人につけるかしかない。ますます荒れずさんだ世の中になってしまいます。

2 もし神がおられるのなら

いったいどうしたらよいのでしょうか。どこに解決があるのか。もしどこにもない、と言うのならやはり私たちはここに座る意味がありません。解決があると信じているから座っています。では、あると信じる根拠は何か。15 節後半から 16 節。「主はこれを見て、公義のないのに心を痛められた。主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。」

無力感にとらわれていた人々にイザヤは語りました。主が私たちのこの現実を知ってくださっている。神が私たちのこの苦しみを知って心を痛められている。私たちには解決できない問題について、神が心を痛められ、何とかしなければならぬと思っておられる。そう語りました。

「いるかどうかもわからない神を持ち出すから戦争になるのだ」と、結論を出す前に考えてみていただきたい。もし神がおられたとしたらどうだろうか。そしてその神が私たちのこの現実に関心を持っておられるというのならどうなるのか。そのことを前提にものごとを考え直してみるのです。それは私

たちの希望と考えて良いのか。それともやっぱりたんなる夢や幻想なのか。そのことを考えてみたらどうでしょうか。

3 どのようにして問題を解決するのか

1) とりなす 16 節

もし神がおられるとするなら、いったいどのようにしてこの罪の現実を解決しようとするのでしょうか。二つのヒントが今日の箇所にあります。

一つ目は 16 節の「とりなす者のいないのに驚かれた」にあります。なんでもご存じのはずの神が「驚いた」とあるので、みなさんも驚いたかもしれません。もちろん、神は何でもご存じですから、驚いたと書く必要はないはずです。それがわざわざ「驚いた」と書くのには理由があります。こんな例を挙げましょう。何か焦げ臭いにおいがするので台所に行ってみたとします。そうしたらガスコンロにかけていた鍋から煙と火が上がっていた。驚いて、あわてて近くに置いた消火器で一生懸命消そうとするでしょう。それがもし火を見ても驚かなかったとしたらどうなるか。燃えるのはしょうがない。燃えてもかまわないととられかねない。消そうという熱意が伝わらない。そんな話になります。

「神が驚かれた」と書くのはこれと同じです。驚くと書くことで、神がこの問題にどれだけ一生懸命取り組もうとしたか、伝わってきます。驚いたのは、「とりなす者がいない」という事実でした。言い方を変えれば、問題を解決するためには、「とりなす者が必要である」と神は見ぬいていたということになります。

なぜ「とりなす者」が出て来るのでしょうか。59 章 2 節にこうありました。「あなたがたの

咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」

罪という仕切りが神と人間の間には立ちほだかっています。その仕切りを取り払うのはだれか。人間はできない。とりなす者が間に入って仕切りを取り払うしかありません。

2) 贖い主が来られる

では、だれがとりなす者になるのでしょうか。義なる神は罪をさばく方ですから、神ご自身がそのままとりなす役割をすることはできません。そのことを説明しているのが 20 節。「しかし、シオンには贖い主としてくる。ヤコブの中の、そむきの罪を悔い改める者のところに来る。主の御告げ」

神ご自身が、「贖い主」とはなり、とりなす者となられます。神と人間との間に立ちほだかっている仕切り、すなわち罪を取り払うために、この方は人となられます。神のお姿のままではなく、罪人と同じ姿になられ、きよい方なのに私たちの罪を負って十字架でさばかれます。これがイザヤの語った約束でした。目の前で公義が曲げられ、悪がはびこっていた時代です。正直者が笑われ、ずるがしこく立ち回る者がもてはやされました。それでも人々は、21 節のみことばを聞いて信じて待ち続けました。「『あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、すえのすえの口からも、いやよりとこしえに離れない』と主は仰せられる。」

この約束は果たされたのでしょうか。もし果たされなかったのなら、幻想とか夢物語に過ぎません。信じる価値はどこにもありません。

でも私たちは知っています。イザヤが語ってからおよそ 750 年後、約束どおりに主は人となって私たちのところに来られました。それが十字架の出来事であった。神がいないのならこんな事は起きないはずではないですか。

神はいないと言うのは簡単です。しかしもし神がおられるのなら、やみの中にあっても光を信じることができます。私たちが今経験している苦しみを大先輩たちも味わいました。それでも光となって来られる方を待ち続けました。そんな信仰の大先輩たちに励まされながら、私たちも主が再び来られる日を信じて待ち続けます。